

## 地域で踏ん張る人たちとの共同作業を経験

京都生協「海の虹プロジェクト」(2013年8月16日~20日)

報告: 2013年9月2日

### ◇中丹の青い空の下で

お盆を過ぎた8月17日、京都府綾部市志賀郷ののどかな道を、南三陸の中学生を乗せてトントン馬車が進みます。かつては馬が曳いていたのが今ではトラクターにと、その動力こそ変わりましたが、眺める景色はのどかな田園と低い山に青い空という、昔変わらない中丹の里の夏。



のんびり走るトントン馬車

トントン馬車を降りた川辺には志賀郷の地域おこしに一役買っている飯井満夫さん(あやべ新しい田舎の学校代表)が、自慢のロケットストーブをずらりと並べて待っています(下写真)。廃缶を組み合わせて作ったロケットストーブは、枝などのわずかな薪で長時間燃焼する効率抜群の優れもの。お米の炊飯・野菜の煮炊きに焼きそばづくりに、パンやケーキを焼くこともできます。

前日、京都舞鶴までの約900kmの道のりをバスで14時間かけてやってきた南三陸の中学生たち57人(※)は、疲れも見せずに、食材の下ごしらえや、ロケットストーブの火起こし、食事台のセットなど自分の役割を見つけて取り掛かります。



焼きそばづくりにチャレンジした女子は、最初こそおっかなびっくりヘラを手にしてはいたものの、次第に作業が楽しくなり、「焼きそばできたよ〜」「ごめん、ホルモンばかりになっちゃった!」と大きな声を上げて60人分を焼き上げたその顔には充実感がありました。

道具や食材こそ用意されたものの、自分が何かをしないと何も始まらないここでの食事。夏休みを利用して京都生協が被災地の中学生を地元へ招く「海の虹プロジェクト」はこうして本格的に始動しました。

※57人のうち、4人は昨年参加した現高校1年生。

## ◇中学生の元気と本気

お昼を済ませた一行に、「川下りをする人！」と声をかけると男子は全員が、女子も半数近くがチャレンジしました。

ヘルメットに救命具のベストを装着。この日も少し日差しにただけで髪の毛が熱くなるような猛暑のなか、川の水は一際涼しく、子どもたちの仲良しグループに、大人が混じった一団は歓声を上げて川に足を踏み入れます。

最初は足首が浸かるだけだった小川も次第に深さを増したかと思うと、1メートルを超える段差を「せーの」と飛び降りたり、背丈を越える葦原を掻い潜ったり、浮かんで流されてみたりと起伏に富んだコースになっています。これが2 km も続くと、さすがに最後は疲れが見え、先頭の子でさえ階段を見つけるたびに「ここがゴール？」と何度も聞いてくる始末。ふだんの生活では絶対ありえない、ちょっとした冒険を全員無事にやり切り、志賀郷の公民館に戻りました。

公民館では、川下りに行かなかった女子が、ボランティアスタッフと一緒にケーキの仕込みを中心にした夕食づくりに精を出します。一方で、前日の長距離の移動と賑やかな夜更かしにも関わらず、早朝から大はしゃぎしてボランティアを圧倒した子どもたちは、川下りから戻ってきて今度こそ疲れ果てたかと思うと、卓球を始めて中学生特有の無尽蔵のパワーを発揮します。



鳥取県畜産農協は京都生協ボランティアのパートナー



そんなパワフルな子どもたちが違った一面を見せたのが、この日行われた向田観音祭での一場面です。津波の被害にあった松から作られた仏像を肌身離さず持ち、「変わった坊主がいたなあと覚えていてくれたら嬉しい」という長福寺の住職が、被災地の復興と安寧を祈願すると、その 20 分間、子どもたちは神秘的な面持ちで読経に聞き入り、各中学校の代表者が焼香するのを見つめていました。



向田観音祭りで復興を祈願

## ◇集落を守りたい

京都に来て3日目の8月18日、この日は綾部市の古屋集落を訪れました。この集落に住まうのは、わずか5世帯の6人。自治会長の渡辺和重さん（61歳）が最年少にして唯一の男性、あとの5人のおばあちゃんは全員80代です。この集落に1年半前に生協宅配の班ができ、住民組織率はなんと100%。けれども冬は積雪で近づけず、渡辺さんが6km下流の綾部温泉まで取りにきてくれるのが頼りという、京都で一番小さな山深い集落です。



山道へ向かう途中は透き通った溪流が続きます。

ここに住まう人たちは平安時代から続くこの集落を、なんとか守りたいと思っています。幸い、古屋の周囲には樹齢500年から1000年の栂の樹約1千本が手付かずで残っています。これを財産に「栂餅」やそれを使った「おかき」や「あられ」など栂の実を中心にした村おこしが5年前から始まりました。

地元ボランティア「古屋でがんばろう会」と一緒に栂の実拾いや特産品づくりに励んでいます。



古屋の財産である栂の樹の群生。

しかし問題もあります。

それは、人の手が入らないため、里山の獣害（シカやイノシシなど）が深刻化していること。そこで、集落を訪れた子どもたちは、公民館となっている古民家に昼食班を残し、軽トラックに分乗して登山道に到着すると、長さ3メートルを越すポールやロープ、ネットにハ



ンマーなどを担ぎ、栃の樹の群落を目指しました。

明智光秀に関する逸話も多い山道はなかなかの急峻な道のりで、岩場やガレ場のような大きな荷物を担いでいくにはしんどい場所も出てきます。途中、湧き水で喉を潤すなど休憩を挟んで1時間あまり、標高650mにある栃の樹を中心にした群生に到着すると、その木陰には涼やかな風が吹いてきます。

この心地よさから一仕事をするのには踏ん切りが必要なところ。4班に分かれた子どもたちをボランティアが先導して鹿除けのネット張りが始まりました。足場や高いところを苦にしない子がポールを立て、力自慢の子は杭を打ち、女子もネットの補修や鹿の嫌がるビニールテープでの縄張りなど、慣れない手つきで苦戦しながらも、みんなで協力して囲いを完成させました。



鹿除けのネット張りの指導をするのは「古屋でがんばろう会」のボランティアの皆さん

帰りの山道を文字通り滑るように降りて公民館に戻ると、食事班の子どもとおばあちゃんたちが一緒に作った昼食には、栃餅の「ぜんざい」がついています。粒々とした舌触りとしっとりした食感の「ぜんざい」は、あっという間に無くなりました。古屋のほとんどの村民、つまり渡辺さんとおばあちゃんたちと参加者一人ひとりが握手をして、小さな小さな集落を後にしました。



## ◇子どもたちは分かってます。

2日目の夕食バーベキューを前に京都生協理事長の渡邊明子さん（右写真）は、「去年より皆さんの表情が明るくて嬉しいです」と挨拶しました。渡邊さんにとっては、去年の最終日の歓迎会以来の再会です。

バーベキューや牛肉を準備した鳥取県畜産農業協同組合の橋本幸雄さんは、京都生協のボランティアとは2011年6月の初回からずっと共に行動して、トレードマークの髭のおじさんとして、子どもたちに親しまれています。そ



の橋本さんに、子どもたちに期待することを尋ねると、「やっぱりあそこから離れて欲しくないね。地元こだわって生きて欲しい」という答えが返ってきました。

それを聞いた京都生協・地産地消推進担当の福永晋介さんは、「被災地を例えるとすれば、パレスチナのような地域と同じに見える。大切な人と衣食住のすべて奪われて、次第に忘れられつつある場所だったら、逃げたくなって当然だし、安易に『がんばれ』なんて言えない。でも、だからこそそこに踏みとどまって欲しい」と、この企画に込めた思いを語りました。

「過疎地や、いわゆる限界集落の置かれた環境は、被災地のそれと根本のところは同じものがある。去年、感想文を読んで、その状況に関わることの意義を、子どもたちがちゃんと理解していることが分かった。だから2回目の開催を決め、予想の2倍を超える申し込みでも全員を受け入れることにした。獣害を防ぐネットを張ったり、限界集落の人々との交流を通じて、普段、被災者と言われる自分たちには支援に回る力があることに気づいて欲しい」

その思いは、子どもたちに確かに届いていました。

去年参加した子どもたちのなかで、隠し事のない話しぶりとやんちゃな行動で一際印象に残っていた佐藤響（ひびき）君（中学2年生）は、今回も川下りをトレイルランニングのように突っ走る元気の良さを見せました。将来は自衛隊に入りたいというその顔つきは子どもから少年のものに変わっていました。

去年、高熱を出して、京都に着いた翌日に新幹線で帰ることになった菅原碧莉（あいら）さん（中学2年生）は、今回の参加をリベンジだと言い、強い日差しをものともせず、ロケットストーブでのパン作りに励みました。京都生協の支援の取り組みについてどう思うかと聞くと、「京都生協の取り組みには感動してます。これからも京都生協が志津川にきたら、駆けつけます。そんな質問、即答ですよ」と笑顔で答えました。



「去年のリベンジ」を果たした  
菅原愛碧莉（あいら）さん（写真左）

## ◇しなやかな京都生協スタイル

初日の舞鶴での15時からの夕食（「舞鶴カレー」にちなんでのカレー）の準備に集まり、渋滞で中学生を乗せたバスが遅れたこともあって夜中の23時まで後片付けをして、翌日は5時半集合で朝食（手づくりの梅ゼリー付）を用意してくれた組合員さんたちを始め、行く先々で、多くの人たちがこのプロジェクトに関わりました。

南三陸町からの往復を入れると足掛け5日間。当初の想定の2倍の人数を受け入れたということは、必要な資金や物量も2倍になったということで、当日は人とモノの移動をどうや



り繰りするかが最大の課題でした。3 日目には、ボランティアを乗せた車が2輪同時バーストで立ち往生する事態もありましたが、他の職員がすぐに予定を変更して代替りのボランティアを申し出るなど、多くの職員がリレーのようにつないで無事に乗り切りました。

京都生協ボランティアのパートナーである鳥取県畜産農協の橋本さんたちは、バーベキューが終わると、どうせまた来るからと言わんばかりにさらりと帰られました。

「今からボランティアに参加できますか？…と言うか、もう電車に乗ってもうじき綾部につきますけど」といきなり電話をしてきた近畿大学農学部4人は、就職活動中に京都生協の援農ボランティアの取り組みを知ったことが縁で一緒にボランティア活動をする仲です。京都生協のボランティアで南三陸に行った京都市内の女子高生2人は、志賀郷で出会った人すべてにニコニコと接し、去年の『海の虹プロジェクト』の舞鶴で昼食の手伝いをしていた女子高生も古屋の公民館で当たり前のよう食事を振舞っていました。



京都市内の高校生の松田さんと武内さんは志津川ボランティアに参加した縁で参加

綾部市長を3期 12 年勤めた四方八州男さんは古屋でのネット張りに同行し、子どもたちに「困難な状況にあっては、殻に閉じこもることなく、一歩前に出ることが大切です。君たちはその一歩を踏み出し、遠いこの集落まで来てくれた」と語り掛けました。被災者を応援しようという気持ちが磁力となって、様々な立場の人が関わっていく様子を、福永さんはこう説明しました。「大事なのはイニシアティブ（自発性・独創力）であって、ここに来ているみんなは気負いなくやって来ている。自分が明日いなくなっても、必ず他の誰かが役割を買って出ると思う」

特定のリーダーの下、覚悟をもって、被災者支援という言葉に力を込めて取り組むのではなく、自発的な参加による地域づくりを意識してきた同志が自然と集まってくる。京都生協が継続的に支援に取り組めるのは、普段の取り組みのスタイルがあってこそ、なのです。



お別れの時、古屋のおばあちゃん、前綾部市長の四方さんら出会った人、一人ひとりと握手。



古屋の公民館の前で。全員集合するとカメラに収めるのも大変な人数。

おしまい